国際シンポジウム
大学教育の成果を何で測るべきか
～日米の最新動向からアウトカム指標を再考する～

日　時：2019年３月１日（金）13:00～17:00
場　所：関西学院大学大阪梅田キャンパス　1405教室

開　会　の　辞

村　田　　治（関西学院大学　学長）

本日は、関西学院大学主催の国際シンポジウム「大学教育の成果を何で測るべきか」においでいただき、誠にありがとうございます。

本日のテーマの「Learning Outcomes」は、現在、世界の大学がどう測るべきか、何を指標とすべきかに悩んでいる一番大きな問題だと思っています。ご存じのように、現在、日本の大学は教育の質をいかに保証するかが最も問われており、学修成果をどう測り、可視化するかということが最もホットなイシューとなっています。私立大学においては、まさに今、社会から求められている指標になろうかと思っています。

本日は学修成果の可視化につきまして、アメリカと日本の現状、その二つをご報告いただきます。皆様方に情報提供をさせていただき、同時にどういう指標を考えていけばいいのか、アウトカムを何で測っていけばいいのかを議論いただき、今後のあり方を考える上で有益になればと思っています。

関西学院大学は、昨年３月にKwansei Grand Challenge 2039を策定し、創立150周年に向けての長期ビジョン、戦略を立ち上げました。その最上位目標といたしまして、「質の高い就労」、さらにはそれを実現するための「学生の質の保証」を掲げています。あえて「教育の質の保証」ではなく、「学生の質の保証」を掲げたのには理由があります。「教育の質の保証」につきましては、それが本当に高等教育段階で身についたものなのか、あるいは、初等・中等教育段階ですでに育まれたものなのかという区別がなかなかつきにくいという視点もありますし、本日、Borden先生のお話の中にも出てまいりますが、「学生の質の保証」をどう測るのか具体的な事例として、Gallup–Purdue Index、あるいはアメリカのカレッジスコアカードなど、幾つかのものが出てまいります。そういう意味では、客観的な指標をどう見ていくのかということは、まさにこれからの本学にとっても非常に大きな課題です。

本日は、本学の事例も後ほどご紹介させていただけるかと思いますが、トータルで皆様方の今後の質の保証、そして学修成果をどう測るかについて話題提供ができればと考えています。